

不登校・ひきこもりに『伴走』して

NPO 法人レインボーハウス 土井 広行

第2回 「来てくれることが大仕事」

「みんな思ったより明るいので驚きました」。レインボーハウスの様子を初めて見た方に、このように言われることが多いです。来てくれている子どもの中には、面白いことを言って周りを笑わせる子も、口数の少ない大人しい子もいます。スポーツが得意な子も、料理やパソコンが得意な子もいます。どこにでもいそうな子どもたちなのです。

そんな子どもたちも、初めて保護者の方と見学に来てくれた時は、緊張で顔がこわばっていることが多いです。見学と言っても、ほとんどの子どもは玄関から中の様子をうかがうだけで帰ります。建物に入れない子どもや、車の助手席に隠れて出てこようとしないう子どももいました。「せっかく来たのに、中に入ってきたら」と保護者の方も言われますし、みなさんもそう思われるかもしれません。でも、子どもにとっては、家からレインボーハウスに行くだけで精一杯なのです。

行ったことのない場所に行って、会ったことのない人に会うのは、誰でも不安であり緊張するものです。家族以外とほとんど会えなくなっていた不登校の子どもにとっては、その何十倍、何百倍も不安や緊張があるのでしょうか。レインボーハウスに着く直前まで「どんな場所なのだろう」「どんな人がいるのだろうか」「いやなことを言われないうか」「一回行ったら、毎日行かなければならないのか」など様々な不安について考え、行くか行かないかで悩み、着いた時にはエネルギーを使い果たしているのかもしれません。

過去5年間で、レインボーハウスの見学に来てくれた子どもは47人。その中で、再び足を運んでくれたのは26人。半数近くの子供たちにとっては、「ここなら行けるかも」と思える場所ではなかったのです。私たちスタッフの力量不足はもちろんなのですが、不登校の子どもが新しい環境・新しい人間関係の中に入って行くことは、大変困難な大仕事なのです。

それだけに、本人が心と体の状態が良い時を選んで、自分で「行こう」と決めて来てほしいと思うのです。本人の状態が一番よくわかっているのは、他でもない本人自身です。「本人から『行きたい』と言ってきたら、来て下さい」と保護者の方に言うようにしているのも、このためなのです。

< 2007年5月19日 ニュース和歌山掲載 >